

特集 就活に成功した先輩に続け！ 「私はサマーインターンをこう活かした」

この夏から始まるインターシップを皮切りに、今後の一生を左右する就職活動がスタートする。ここからの1年は、誰にとっても貴重な1年。時間は等しく過ぎていくだけに、事前に準備を済ませておいて、無駄のない就職活動を送りたいものだ。

就職氷河期と呼ばれる中でも、早々に内定を勝ち取った先輩たちは1年前にどんな夏を経験したのか。インタビュ形式で2人の先輩の成功談を紹介していこう。

ケース01
国内大手損害保険会社
アクチュアリーコース内定
田中 裕貴さん

田中さんは自らの興味関心から、研究者以外の道を選択。アクチュアリーという新しい理系の可能性を模索した。夏のインターンでアクチュアリーの業務を経験し、実態とイメージのギャップを埋め、見事に志望通り、損保のアクチュアリー職で内定を勝ち取った。

——損害保険会社のアクチュアリーに内定とのことですが、アクチュアリーという仕事に興味を持ったきっかけは？

大学3年のころまでは、普通にメーカーへの就職を考えていました。ですが、理系として授業を受けているうちに、自分はメーカーの研究開発職に興味がないということが分かってきてしまいました。例えば設計の課題があった時に、同期は締切直前まで突き詰めて取り組んでいたのに、自分にはそこまでの意欲を持てなかったんです。

それでほかの選択肢を考えた時に、出てきた仕事はアクチュアリーでした。アクチュアリーという職業を初めて知ったのは高校生のころです。学校で配られた職業を紹介する冊子の中で「保険会社で数学的な知識を活かして商品を作る仕事」とありまして。文系のイメージが強い保険会社の中に、理系の知識を活かして働く仕事があると知り、驚きました。メーカー就職を捨ててアクチュアリー

について詳しく調べてみると、アクチュアリーになるには資格が必要で、東大・京大で数学を専攻した人でも7〜8年かかるで紹介されていました。「雲の上の人にしかなれない職業なのか」とも思いましたが、日本アクチュアリー会のホームページで試験の例題を見ると、努力次第では手が届くんじゃないかというレベルの問題だったんですね。正会員が1200人程度しか居ないことも分かりましたし、逆にそれだけ少ないのなら挑戦してみたいという意欲がわいてきました。

——アクチュアリーという仕事は、どんなところが魅力なのですか？

「数学を道具として使う」ところが面白い。

面白いと思っています。自分は数学が好きなのですが、数学科でやるような純粋数学の内容よりも、先人が積み上げてきた知恵を学んで応用していくところに興味を持っていました。アクチュアリーの仕事は、周知の数学知識を保険商品の開発などに役立てようとするものですから、自分の興味とも合っていました。

セミナーなどから得た知識なのですが、アクチュアリーの仕事で使う数学のレベルは、大学の教養課程くらいだと言われていました。試験の問題を見て、それくらいなのかなと思います。試験の時の数学が一番難しいと言われるくらいで、一般には実務で使う数学のレベルはそんなに高くないみたいです。

インターンを経験して
イメージと実態のズレを認識。
参加するからには目的意識を持って



日常の業務では、基本的には高度な数学は使わず、Excelを使ってほとんど四則計算で処理をします。Excelで済んでしまうところも多い仕事なのですが、正しい論理で計算されているか判断する力や、保険商品で使われているデータについて数学に詳しくない人にも分かりやすく説明する力などにも必要になります。

「元々のイメージは「数学の専門家」という感じでしたが、コミュニケーションも重要な仕事のようにですね。」

——就職活動はどのように進めていきましたか？

就活を始めたのは夏休みからです。

研究室の同期がインターンに参加しようと積極的に活動していたので、自分も出遅れてはいけなと焦っていました。

夏のインターンには業務体験ができるインターンと、セミナー形式の1DAYインターンの大きく2種類があるんですが、アクチュアリーの仕事を体験できるインターンに、一度は参加しておきたいと思っていました。

アクチュアリーのインターンを開いている企業は少ないので、選考を通る不安もありましたが、何とか参加することができました。信託銀行でのインターンでしたが、退職給付債務の計算業務を経験させていただきました。

アクチュアリーの仕事と言えば、数学をガリガリ使っているイメージですが先ほどのExcelを良く使うという情報はそのインターンで知ったことです。また、専門家ばかりが集まった職場だろうと考えていたんですが、パートの女性もいらっちゃって、協力しながら仕事を進めていました。

夏にインターンを経験できたことで、アクチュアリーという仕事に対する印象はだいぶと変わりましたね。

——この1年を振り返って、やり

直したいことなどはありますか？

強いて挙げるとすれば、会社選びの軸を持つておけば良かったという点です。

幸いにも複数の企業から内定をいただけたんですが、どこに入社するか悩んでしまいました。悩むのは仕方ない面もあるにしろ、どういう軸で会社を選ぶのか、確固たるものを持つていなかった。それで結論を出すまでに時間がかかり、迷惑を掛けてしまいました。

複数社から内定をいただけた時にはどうやって企業を決めるのか。もっと早い時点から判断軸を意識してインターンやセミナーに参加しておくべきだったと反省しています。

——これから就職活動を迎える学生にメッセージをお願いします。

インターンには漠然と参加しないでください。就活を始めたことに満足して酔ってしまうのではなく、インターンに参加するからには目的意識を持つようにしましょう。

自分自身の反省でもあるんですが、あるセミナーを漠然と受けてしまい、その後の面接選考で講師の方と再会したことがあります。ポイント稼ぎしようとして「セミナーではありがたうござ

いました」とお礼を言ったら、「どんなことを勉強しましたか？」と質問を返されてしまった、はつきりと答えられなかったんですね。

私と同じような失敗をしないためにも、インターンに参加して必ず何かを持ち帰るんだと強く意識することを忘れなようにしてください。



東京大学大学院 工学系研究科
航空宇宙工学専攻 修士課程2年
田中 裕貴(たなか・ゆうき)

次に紹介するのは初志貫徹で外資系ソフトウェア開発会社から内定を得た上野さん。昔から好きだったプログラミングを仕事にしようと、業界トップクラスのソフトウェア開発会社のインターンに参加。優秀なエンジニアとの交流を通じて、インターン先への入社意欲を高くした。その思いが通じたのか、インターン先から無事に内定をもらえたという。

——デベロッパーとしてソフトウェア開発の企業に進まれると伺いましたが、その道を選ばれた動機を教えてください。

プログラミングが好きだったので、「プログラミングを職業にできたら」と前から考えていました。

実際にコードを書ける仕事に就けば一番良いと思っていたので、ソフトウェア開発の企業を中心に探していました。ただ、大学で勉強するうちにプログラマーとして生きる道以外にも、

システムインテグレーター(SI)という働き方もあると知りました。システムの全体像を考えて、要件をまとめていく上流工程にもかかわれる仕事は嫌いではないと感じていましたので、SIへの就職も視野に入れて活動していました。ですが、第一志望だった内定先から内定をいただけだったので、就職活動でSIを受けることは結局ありませんでした。

SIのほかに、自分でプロダクトを創出する仕事ということで、Web系の会社にも興味を持っていました。そこらにもアンテナを立てていましたね。

——「デベロッパーになる」というのは、いつごろから決めていたんですか？

学部4年になったあたりからです。それまではキャリアについて考えたことはあまりなくて、ただ「プログラムは楽しい」と思っているだけだったんです。社会人になるか大学院に進学するか、4年になった時に2つの選択肢が突きつけられることになりました。「大学院ではなく社会人に進もう。それから、社会人になってからもプログラミングを続けていくためにはどうすればいいのか」ということを考えて、いろ

どうせインターンするのなら、多少きつくても深いレベルで仕事体験できるものを

いろ調べてみたのですが、それがプログラマーとして働くことを考え始めたきっかけですね。

IT系の企業サイトを訪問して、採用ページからどんな職種で採用しているのか、チェックしてみました。ほかにもプログラマー志望の友達と話して、情報を集めてみたりもしました。

——夏のインターンには参加されたのですか？

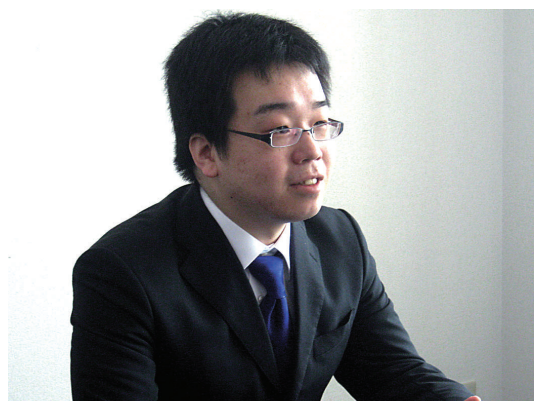
はい、Webから探して2カ月間の長期インターンに参加しました。1DAYのインターンもかなりありましたが、IT業界について教えてくれるという内容が多くて、コアな業務内容まで突っ込んで教えてくれるものはありませんでした。どうせインターンをするのなら、多少きつくても深いレベルで仕事を体験できた方が大きなものを得られると思います、長期でインターンに参加するという選択肢を選びました。

インターンでは、1人一つずつプロジェクトが与えられました。僕の担当したプロジェクトは、直接コードを書くことはなかったのですが、プロダクトまわりの調べ物を任せられました。インターン先のプロダクトのうち、資料が整備されていないものについて調べて整備しておくという業務でした。間接的な仕事でしたが、資料を整えておくことで、その情報を社内のデベロッパーにフィードバックして、プロダクトのクオリティを上げる効果を期待されていました。

社内では、ほとんど社員と同等の扱いを受けていました。メールアカウントも発行してもらえましたし、社内の打ち合わせにも参加させてもらえました。

——ずいぶん深い内容のインターンになったようですね。

かなりコアな部分まで踏み込ませてもらえました。インターンの感想とし



「プログラマーには30歳、35歳で限界が訪れるという説があるようですが、実際にプログラマーの仕事に肌で感じてどう思われましたか？」

僕がインターンを経験した会社ではそれは当てはまらないと感じました。実際に普通の業務のスケジュールで生活してみても分かったことですが、モチベーションは上がる一方だったんです。確かに過酷な労働環境で働かされていたら「プログラマーの目が死んでる」なんていう風評も立つのかもしれませんが、実際にはそのような過酷さは無かったですし、そこは本当に企業によるところなんだろうと思っています。

「大学院でもIT系の研究をされていると伺っていますが、研究としてのプログラミングと仕事としてのプログラミング、どんな違いがあると感じましたか？」

仕事をする以上、お客様が居るわけです。お客様のニーズに合ったものを作らないと、どんなにレベルの高いものを作っても売れません。対して研究というのは、大ざっぱに言うならば、レベルの高いこと、新しいことを発表したら、みんなに受け入れてもらえます。

そんな視点の違いが大きいですね。

「今後の抱負などありましたら教えてください。」

今の目標は米国本社で働くことです。今の僕には雲の上の存在ですが、内定先の本社は米国にあるので、そこで働きたいなと願っています。

僕のスタンスとして「自分の今の能力を考えて、ちよつと無理だと思えるようなところに身を置くこと」を心掛けています。「きつい。無理だ」という状態を続けること。僕としては、そうすることで自分のポテンシャルを引き出せると考えています。

「これから夏を迎える就活生へのメッセージをお願いします。」

インターンへ参加することのメリットは、学部3年、修士1年の皆さんが今考えているよりも、とても大きなものだと思います。まずは気後れせずインターンを受けてみてください。

インターンに参加するほかに、希望の企業にアプローチを掛ける、実際の就職する姿を自分で想像してみる。何でも良いので、働いている自分の姿を少しでもイメージできるようにアクション

ンを取ってみてください。そうしてやってきた事は、いずれやってくる本格的な就職活動の時期にはとても大きな、本場に大きな資産となっているはず。アクションを起こさないと夏を過ぎてしまふのは、すぐくもつたないことです。自分にとってちよつと無理するくらいの環境に身を置くことで、充実した夏を過ごせるのではないのでしょうか。



京都大学大学院 情報学研究所
通信情報システム専攻 修士課程2年
上野 優喜(うえの・ゆうき)

ては期待以上ですね。

特に期待を上回ったのは、すごいベロッパが社内集まっていたこと。話をただで良い経験になりましたし、刺激を得られるような方ばかりでした。自分のモチベーションがどんどん上がっていくのを感じました。

ただ、やはり大変な面もありました。というのも、インターンには珍しく参加することで報酬をもらえたんです。報酬をもらう以上は、成果を出さないといけない。新しい環境でしたし、成果を出さないといけないと責任を感じ、最初のころはかなりのプレッシャーでしたね。